

巻頭言**学生よ、技術者よ、立ち上がれ！**

昭和 41 年卒 イー・アクセス株式会社代表取締役会長 千本 倅生



昨年来、日本という国の地盤沈下に警鐘を鳴らす声が多数聞かれるようになった。GDP で中国に抜かれ世界第三位となったことが最大の契機だったかと記憶しているが、実際にはすでに、S & P の 2009 年世界市場調査・株価上昇率で日本が世界 45 ヶ国・地域中ワースト 2 位（44 位）と惨敗するなど、日本という国の将来性・発展性が徐々に、また構造的に劣化してきていることを市場は冷徹に評価し始めていたのだ。

先日、私の著書の中国語版出版を記念して、北京・清華大学で講演する機会を得た。清華大学は、胡錦濤国家主席や習近平国家副主席（次期国家主席予定）の母校であり、また伝統的に理工系が特に優れている。発展しようとする国がまさに最も必要とする人材を育成・輩出している、中国トップレベルのエリート校である。授業も終わり閑散とした夕暮れ時に構内に到着した私を迎えたのは、講堂に入りきれず溢れ返る聴講希望者の集団である。講堂内に足を踏み入れると、歓迎の横断幕や、通路や階段に座り込んで場所を確保しようとする学生の列が目飛び込んできた。その熱気のまま講演を終えるや、今度は延々と途切れない質疑応答、しかも驚くほど流暢な英語での質問が留学経験のない学生達の口をついて出てくるのである。異国から来たベンチャー起業家から何でも学んでやろうと必死なのだ。学部不問の募集だったが、質問内容から察するに理工系の学生も多数混じっていた。伸び盛りの国のパワーに心底圧倒され、またアントレプレナー（起業家）精神に通ずる向上心とハンタリーさに強い共感を覚えただけでなく、理工系の学生も、技術や理論に加え、その応用としての事業化に強い興味と意欲を持っていると感じ、深い感銘を受けた。

携帯事業を営む当社イー・モバイルのパートナー企業である Huawei 社もまた、中国を代表するハイテク企業である。数千人の修士・博士号技術者を抱えすでに世界トップクラスの事業規模と技術レベルに達しているにも関わらず、チャレンジ精神溢れるアグレッシブな製品提案と走りながら解決するパワー、そして夜を徹して問題点を修正してくる熱意が実は最大の売り物である。彼らはまた、日米等先進国だけではなく、遠くアフリカ大陸のモバイル産業を席卷するほどの国際性と戦略性も併せ持つ。恐るべき技術者集団である。

日本は一昨年、今年と、立て続けのノーベル賞複数受賞に沸いた。京都大学は 1949 年に日本人で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士を始め、5 人の受賞者を輩出しており、そのいずれもが理学部・工学部出身である。また今年も、京大発の iPS 細胞の研究が受賞するのではないかと期待され、背景として語られる本学の自由闊達でチャレンジ精神旺盛な学風は今も健在であると誇らしく感じた。また、残念ながら一連の受賞の対象は 1970 年代の成果であり最近の研究実績ではないものの、30 年以上も経って高い評価を得られたことで、国力や成長性に暗い見方が支配的な今の日本の重い雰囲気であって、再び目線を起こし元気を出そうという気にさせる明るい話題だったのではないか。更には、成果を上げ

るには目の前の取り組みを一層の高みに押し上げる懸命の努力と、忍耐強い継続への熱意が必要であることを改めて思い起こさせてくれた。

物理、化学、数学などの国際オリンピックで毎年極めて優秀な成績を収めるなど、高校までの日本の教育レベルは世界に誇れる水準にあらうかと思う。一方、果たして日本の大学は、入学自体がゴールとなってしまうてはいないか。2010年のQS世界大学ランキングで、日本以外の大学である香港大学が初めてアジアトップとなり、京都大学はわずかに及ばなかった。単純なランキングに一喜一憂すべきではないが、経済や国のあり方といった大きな潮流と軌を一にしてはいないか。「二番じゃダメですか」というフレーズは有名になったが、志の持ち方としては、やはり少しでも高みを目指す気概が欲しい。

日本は、国内市場の成熟や少子高齢化など固有の要素に世界的な経済苦境も加わり、失われた10年、20年から抜け出せないでいる。また、海外留学生の激減や海外旅行の不人気にも見られるように、外国に対する関心や外に開かれた感覚が急速に低下しているとも言われる。しかし、国家的危機感に突き動かされて欧米に学び、急速な近代国家建設を果たした明治時代や、SONY や HONDA を輩出した戦後の復興期に思いを馳せるにつけ、日本人はもともと好奇心に満ち、勉強や向上に対するハングリー精神を強くもっているのだとの確信が溢れてくる。考えてみれば、SONY 創業者の井深大氏や盛田昭夫氏、HONDA 創業者の本田宗一郎氏は、実業家であるとともに優秀な技術者であった。資源を持たない島国は国内に閉じこまれるはずもなく、世界に目を向け、知恵を絞り、技術力を磨き、熱意を持って世界と積極的に関係を持っていかねば生きていけないのである。

ダボス会議で有名な「世界経済フォーラム」2010年版報告書で日本は「付加価値」「生産工程」「顧客重視」といった「ものづくり」の分野で底力が非常に強いと高い評価を受けた。目先の指標に自信を失い、政治や経済の停滞感で萎縮しがちな日本だが、国力の基盤の質はまだまだ世界最高水準にある。将来に目を向けても、今後世界的に大きな成長が見込める携帯産業や、医療福祉・教育・電子政府といったICT分野では、日本の高い技術力が推進力となる。また、最近目にするようになった官民挙げてのインフラ事業輸出の試みは、これまで日本に眠っていた世界最高水準の工学系運営ノウハウを発掘し活用する新しい動きであり大いに期待したい。失敗を恐れず海外に挑んだかつての先達技術者のチャレンジ精神を思い出すのに遅いことは決してない。日本の若い世代が自らの潜在能力に自信を持ち、好奇心を豊かにして真摯に勉強し、ハングリーさを思い出し、そして世界に開かれたマインドで、市場の活性化とグローバル化、そして新産業の創出に向け、挑戦を続けることが大切である。

日本の学生よ、技術者よ、今こそ立ち上がれ！